

# ひなしろ

# 美奈宜神社と巻城の地名の始まり

(原文)

『三世紀初頭、神功皇后のお話より』

(現代語訳)

天皇隱崎ねりさき事こと皇后悲歎くわいさん新羅國しんらこく討う取と立たて散慮さんりょ廻まわ給けい志賀しが島しま明神めいじん神かみ其時そご者もの磯良丸姓いそらまる安曇あづみ海中かいちゆう柄おもて時とき陸りく地じに出来でき武内ぶない大臣だいじん言い磯良丸いそらまる水陸すりく自在じざい賢けん人ひと也や被は召めし被は可べ被は候ま令れい奏さう國こく武内ぶない下げ勅宣てつせん班はん被は召めし磯良いそら始はじ外ほか隱隠更よ不ふ相あ達た和わ余よ其特そのとく式しき內うち外ほか之の方ほう便びん破は蕩とう其心そのこころ磯良いそら又また自じ本ほん愛あい物もの增ふ興き者もの也や然ぜん則そ以い歌舞がふ之の能のう可べ石いし寄よ志賀しが嶋磯良しまいそら演えん音おと天あま岩いわ戶と曲く被は始はじ行ゆ神樂かぐら於お詩し柏子はくし八人女はちじんめの等など翻ほん秋あき盡つく曲く時とき磯良いそら童わらわ歌うた宋そ龜かめ甲こう來くわ臨らん其形そのかたち甚ひな醜陋しゆろ也や身み私わたくし恥はず思おも故ゆゑ不ふ近ちか付ふ本ほん特とく神樂かぐら人ひと等など計く知し其その心こころ隱隠而と奔は遊ゆ之の時とき磯良いそら同とも感かん歡がん隱隠而と奔は出で時とき武内ぶない安語あんご待まわ皇后こうごう勅先てつせん不ふ討とう熊襲くまし者もの可べ有る乃の勅てつ武内ぶない計く之の安やす可べ術じゆ以い磯良いそら十方じやうぽう石いし可べ拾ひ貢くう進しん可べ被は下げ勅てつ也や平ひら時とき磯良いそら蒙うけ勅てつ海童神かいどうじん河童神かわとうじん等など語ご集あつ十萬石じゅうまん之の磯いそら一丈いっじょう之の下した拾ひ上あが辛から特とく以い巻まき高たか十丈じゅう之の城じやう築つき其半そのはん奉まつ入い皇后こうごう以い和議わぎ招ま寄ま熊龍衣くまりゆうい曰い皇后こうごう與よ御坐ござ速はや可べ來ら告ま申ま熊龍衣くまりゆうい城じやう入い其時そご皇后こうごう城じやう下した逃な出だ給ま復ま巻まき城じやう極きわ度ど熊襲くまし討とう計く討とう所ところ是まことに也や

天皇が崩御されたことで、新羅国を討伐しようと観慮を廻らされた。志賀島明神の磯良丸（いそらまる）、姓は安曇（あづみ）と申す者、海の中をすみかとし、時々陸に出て来ていた。武内の大員（おおおみ）が言うには、磯良丸は、水陸自在の秀でた者である、彼を召し出されて協力すべく仰せらるればよろしかろうと。（こう）奏上し、武内は勅宣を下して、磯良を召し出そうとしたが、はじめは逃げ隠れして、一向に勅命に従わなかつた。その時、武内は内外の知恵工夫を廻らして、その心の蕩（とろ）かしてしまおうと企てた。磯良は、もとより宴席を好み、（それによつて）興に乗ずる者である。そうであるならば、歌や舞を以て呼び寄せるといとして、志賀島の磯良の浜にて、昔天の岩戸の音曲を行い始められた。神樂を歌い、拍子を打ち、八人の娘らが袂（たもど）を翻して、音曲を尽くした。その時、神樂を舞う人達は、その心を計り知つて（皆面を着けて）顔を隠した。舞踊の折、磯良は同調感心して面を隠し、共に舞い出て来た。この時武内はいとも簡単に話しかけることができた。皇后は、「先ず熊襲を討たなければ、心配ごとが多くこととなるでしょう」と仰せになつた。武内は計つてた安く亡ぼす方策があり、磯良が計画して、かしく思うために近づこうとはしなかつた。その時、神樂を舞う人達は、その心を計り知つて（皆面を着けて）顔を隠した。舞踊の折、磯良は同調感心して面を隠し、共に舞い出て来た。この時武内はいとも簡単に話しかけることができた。皇后は、「先ず熊襲を受け、海童神・河童神らを誘い集めて、十万石の磯（みな）を一夜の内に拾い上げてしまつた。その磯を以て高さ十丈の城を築いて、その中に皇后に入つていただき、和議の詞（ことば）を以て熊襲を招き寄せて、皇后はこの中におられるので速やかに来臨すべき由を告げたところ、熊襲は喜んで城内に入つてしまつた。その際、皇后が城中を逃げ出された後、巻城（みなしろ）を崩してしまい、熊襲を討ち取つてしまつた。筑前の州（くに）に巻城（みなしろ）とふりがなあり）と申す所がこれである。

平成二十七年七月十九日

現代語訳責任

武田忠信

追補

1 漢字は、新字体に統一

2 ( )書きは、訳意を明らかにするため、意味、補充等を

訳者が補つたもの。

3 一丈は、十尺。十丈は、百尺。一尺が約0.3メートル、よつて巻城の高さは、約三〇メートルと推察される。